



Data 2022-70

監督・脚本: ミシェル・フランコ
出演: ネイアン・ゴンザレス・ノル
 / ビンド/ディエゴ・ボネータ
 / モニカ・デル・カルメン

👁️👁️ みどころ

腐敗した旧体制を打破し、ニューオーダー（新秩序）を樹立することは大切。しかし、かつての大日本帝国が唱えた、“東亜の新秩序”とは？しかして、メキシコの某都市における、ニューオーダー（新秩序）とは・・・？

広大なお屋敷での豪華な結婚式。それは映画の冒頭にふさわしい情景だが、そこに街頭デモの暴徒が乱入すると？そして、警察や軍部が暴徒と結託し、殺戮、拉致、身代金要求の地獄絵になっていくと？そんな状況下、新婦は“ある事情”で式場の外にいたから、ラッキー！一瞬そう思ったが・・・。

折りしも、ロサンゼルスで開催中の米州首脳会議は大混乱。それでも、現実には、本作よりよほどマシ？島国ニッポン人は、もっと目を広く世界に向けなければ！

—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————

■□■メキシコってどんな国？政治は？経済は？社会状況は？■□■

島国に住む日本人は、もともと海外（世界）への関心が薄い。とりわけ、南アメリカ（大陸）はアフリカ大陸とともに日本人が知らない世界だ。したがって、北アメリカ最南端の国、メキシコと聞いても、せいぜい思い浮かべるのは、第1にサボテン、第2に『アラモ』（04年）『シネマ6』（112頁）や『夕陽のガンマン』（65年）等の西部劇（マカロニ・ウェスタン）だろう。他方、メキシコがペルーやチリ、ブラジル等と並ぶ中南米の大国であることは知っている、その政治は？そしてまた、経済は？社会秩序は？それらについては、ほとんど知らないのでは？

トランプ前大統領がメキシコからの移民の大量流入を阻止するため、国境に巨大な壁を作ると宣言したことによって、メキシコからアメリカへの移民問題が注目を浴びることになった。多くの国民が必死にアメリカに移民しがっているということは、メキシコはダ

メナ国ということ？『ノー・エスケープ 自由への国境』（15年）（『シネマ40』未掲載）はその国境問題を描いていた。

本作は、そんなメキシコを舞台にした映画だが、移民問題を直視した映画ではなく、パンフレットのINTRODUCTIONによれば、本作は「広がり続ける経済格差とそれがもたらす社会秩序の崩壊、今まさに我々が直面している危機的状況を描くディストピア・スリラー」だ。そして、「目を背けたくなる、それでも刮目せねばならない“最悪”のリアリティに、観る者の覚悟が試される86分を体感せよ。」と書かれている。こりゃ、期待感いっぱい！

■□■マリ안의結婚式は豪華だが、周辺は不穏！暴動に！■□■

フランシス・フォード・コッポラ監督の名作『ゴッドファーザー』（72年）は、マロン・ブランド扮するヴィトー・コルレオーネのお屋敷で举行される末娘コニーの結婚式から始まったが、その豪華さに圧倒された。それと同じように、本作も裕福な家庭で生まれ育ったマリアン（ネイアン・ゴンザレス・ノルビンド）の結婚式を祝うため、広大なマリアン宅の庭で行われている結婚式のシークエンスから始まる。

そこに集う着飾った政財界の名士たちの前で、新郎とキスを交わすマリアンは幸せそうだが、マリアン宅から程近い通りでは、広がり続ける貧富の格差に対する抗議運動が今まさに暴徒化しようとしていた。本作の舞台はメキシコだが、マリアンの家はどこにあるの？時代はいつ？父親は何をしているの？集まる名士たちはどんな面々？『ゴッドファーザー』冒頭の結婚式のシーンでは、コルレオーネ家のファミリーたちの人物説明が丁寧になされたが、本作ではそれが全くない。豪邸の中の多くの使用人は一見従順に働いているようだが、彼ら彼女らの目にもどことなく不穏な雰囲気！こりゃ一体どんな展開に・・・？

■□■タイトルに注目！ニューオーダー（新しい秩序）とは？■□■

本作のタイトルになっている「ニューオーダー」とは一体どんな意味？レストランに入って料理を注文する時の和製英語が“オーダーする”だが、本作のタイトルになっている「ニューオーダー」とは、新秩序のことだ。かつて日本（大日本帝国）が中国大陸に侵攻するについては、“東亜の新秩序”が唱えられ、“五族協和”がスローガンとされたが、さてメキシコの某都市におけるニューオーダー（新秩序）とは？

本作のパンフレットには、飯島みどり氏（立教大学ラテンアメリカ研究所）のCOLUMN「既視感満ち満ちる劇薬」がある。そこでは、「正視に堪えない『ニューオーダー』（新秩序）はその実既視感に満ち満ちている。」と書かれているが、その“注”として、「字幕には『新体制』と登場する。スペイン語原題のordenは男性名詞すなわち秩序を意味し、命令や注文を意味する女性名詞とは明らかに区別される。しかもラテンアメリカにおける『秩序』はこれを『乱す者』を強く敵視する強権的な治安維持の発想と密接に結びつく。従って厳密には『新秩序』と解するのが望ましい。英語のorderではその意味合いがややぼやけることも否めない。」とクソ難しい解説がされている。

このように、“ニューオーダー”をどのような日本語に翻訳するかは難しいが、とにかく本作は、マリアン（の父親）たち少数の富裕層が支配しているメキシコの秩序（体制）が、街頭に広がる抗議運動（暴動）によって一気にひっくり返るサマを、ミシェル・フランコ監督の視点で描いたものだ。学生時代にマルクス主義を勉強し、革命による社会変革を勉強した私は、なぜマルクスが予言したように高度に発達した資本主義国のイギリスではなく、帝政時代のロシアで革命が起きたのかが不思議だったが、一国の“革命”には前衛政党たる共産党や、レーニンのような優れた（冷酷無比な？）指導者が必要不可欠と考えていた。しかし、本作が描く暴動とニューオーダー（新秩序）は、それとは全く違うハチャメチャなものだから、その恐ろしい展開に注目！

革命は、中国の歴史でもマルクス主義でも“崇高”なものだが、本作のスクリーン上で見るのは革命ではなく、明らかに暴動。こんな暴動で、本当にニューオーダー（新秩序）が実現するの？

■□■警察は？政府は？ヒロインの行動は？■□■

どこの国でも、政府に対する国民の不満はつきもの。したがって、人権の国フランスでは抗議デモのオンパレードだが、先進資本主義国は人権と秩序のバランスをそれなりに保っている。しかし、香港の雨傘運動や民主化運動の弾圧ぶりを見ると、一党独裁国家のそれは全く違うことがよくわかるし、後進国（？）の南アフリカ諸国でも、デモや暴動は付き物だ。それらの世界の動きは毎日のニュースで知ることができるが、ミシェル・フランコ監督が脚本を書き演出した本作は、舞台こそメキシコだが、本作に見る暴動は全く架空のお話。

街頭デモを展開していた暴徒たちは平気で、ヒロインの家の中に侵入してきたからアレレ。しかも、彼らは武器を持っているから、いくら警告しても無駄。屋敷内に乱入し始めると、彼らはもはや、殺したい放題、盗みたい放題、そして犯したい放題だ。警備保証会社は？警察は？その前に、あんなにたくさんいる使用人たちの自己防衛は？それらの期待が全くムダなことは、本作を見ているとよくわかる。これまでこき使われてきた使用人たちは“これ幸い”とばかりに暴徒に加わっていくことに。マリアンの父親は真っ先に射殺され、続いて母親も。そしてマリアンの親族たちや結婚式の招待客は次々と拘束され、人質にされていったから、さあ大変だ。

そんな中、マリアンだけは元従業員の頼みを聞くために走り回り、今は忠実な使用人とともに屋敷外に出ていたから、ラッキー！一瞬そう思ったが・・・。

■□■これでもか！これでもか！目を覆う惨状に驚愕！■□■

本作は86分と比較的短いが、鑑賞後はぐったり！それは幸せいっぱい結婚式場への暴徒の乱入から始まり、その後一貫して続いていく“地獄絵”があまりにひどいからだ。暴徒たちに乱入されたお屋敷内での、それまでの支配者層の殺戮や拉致、人質化は想定内の範囲内だが、折よく屋敷の外に出ていたマリアンを腐敗警官が拉致監禁し、身代金を要求

するシークエンスになっていくと、ビックリ！しかも、これは彼らが特別な悪徳警官だからというわけではなく、警察（軍部）全体として取り組んでいる“悪事”だから、ひどい。

さらにすごいのは、身代金を警察（軍部）の上層部が独占していることに気付いた第一線の警官たちが、さらに自らの利益確保のために独自行動を起こすこと。結局それはバレてしまい、彼らはさらなる悲劇の犠牲者になってしまうわけだが、本当にこんなことがメキシコの警察や軍内部で起きているの？これはあまりにも“性悪説”の立場に偏りすぎているのでは？

ナチスドイツによる「ホロコーストもの」映画では、時計宝石はもとよりドレスや帽子まで身ぐるみ剥がされて裸にされてしまうユダヤ人女性の姿が時々登場するが、本作でも住民たちの暴動と結託してクーデターを起こした警察や軍部による富裕層の人質化身代金要求大作戦の中で、それと同じような風景が登場するので、それに注目！これでもか！これでもか！と続く、目を覆うような惨状に驚愕！

■□■こんな最新情報も！米州首脳会議にメキシコは欠席！■□■

本作を鑑賞した翌日、新聞各紙は6月8日に米西部カリフォルニア州ロサンゼルスで開催する米州首脳会議に「メキシコ大統領ら欠席」の見出しが躍り、①ベネズエラ、ニカラグア、キューバの3か国を招かないと決めたこと、②それに対応してメキシコのロペスオブラドール大統領が欠席を決めたこと、を大きく報道した。

「米州首脳会議」とは、南北アメリカ、カリブ海の各国首脳が集まり、共通課題について議論する会合で、1994年に米マイアミで始まり、約3年に1回のペースで開かれ、今回が9回目。2022年11月の中間選挙では、移民問題が大きな争点の一つとなるため、バイデン政権は、この米州首脳会議を機に、移民問題で早期に成果を出すことを狙ってきた。それは、グアテマラやホンジュラス、ハイチなど、米国に大量の移民が流れている国々が会議の構成国に多く含まれるためだ。特に米国と国境を接し、陸路で北上する移民が必ず通るメキシコは移民問題を議論する際には外せない存在だ。

ところが、バイデン政権は上記3か国を「民主的でない」と決めつけ、米首脳会議に招待しないとしたため、“新興左派”と呼ばれるメキシコのロペスオブラドール政権は、それらの国に「連帯」を示したというわけだ。さらに、同じ左派政権のボリビアやホンジュラスもメキシコに同調し、両国首脳は欠席も確実視されているそうだから、バイデン政権の「独裁3か国排除」決定の波紋は大きそうだ。

これが現在のホントの南アメリカ諸国やメキシコの姿だから不安がいっぱい。しかし、それでも本作に見るメキシコのニューオーダー（新秩序）よりはよほど良さそうだ。本作を鑑賞するについては、そんな現実との対比もしっかりと。

2022（令和4）年6月11日記